中村授定文庫
文 庫 18
683

寛政七年

学問 石洞 集

（雪舟追善）

宮城県図書館蔵書

老師白眼臺雪才聖人は若かりしときかんつふきの学校にあらひて止観の月にうそゆき卯なりしつち東武園になる泉光陵山の主となり玉ふ。中年にして世のいたつかはしきをいとひて恬淡を人に附属し甚倩に小室をむすび常に風雅を友として二代宇蹄の門にもとむ。そとよりこころのあつき處は師の旨にかなひて雪才の名白眼臺の号をくりたまへり。これといたはりかちにして越路につそるしら雪はチかいま

中村保定文庫

No.

(大東京文具チエーン特製)

り筑紫をゐる夢艸ハ下冷さん もこいちろし
とて行脚のそゝ玩たちなとちかき所〳〵はひ
とひこりの紀行をつゝりて伊予鎌倉くらの月
影に宗祖の古跡を拝しめくりいかほ箱根の温
泉は身を養ふのたすけありと、折〳〵行かひ
一中に天明七年の小春月は伊香保に旅やとり
して時雨塚をいとなゝ祖翁の百とせの忌には
艸菴の前に雪塚を造立しいしあみにもいとせ
沸ぬ雪や雪と悔ひ玉ひしか、こゝ〳〵ニ十あま
りふたつの秋も彼近き水無月のはしめすゝ暑

(大東京文具チエーン特製)

にあたりてわつらはしなときこえ玉ふに驚き
第さ軽けいたはりまゐらせしかは日にそわて
ゝまゝかほなるもいとゝうゝしかりけり、夏
も暮はて、炎暑すてにしりそき秋氣庭中にき
たれり、けふは殊更すゝしきに此ほとのつか
れもわすれ侍りとて左右の人にかきをこさ小
て秋たつや夕ゝの雲今朝の雨とかいやり玉へ
りこのまゝならは是会には皆〳〵つとゐて快
復の賀遊をなうけんなと心のゆるにいかに
せん又例の病となりて飲食日〳〵に薄く医第さ

らに驗なし、終に孟秋はしめの九日此世の露に伊を弾し眠るかごとく迂化し給へり、明月不還藏碧海白雲秋色滿蒼梧と弾るもの、涙は秋風にはしあへぬ袂とはなりけらし、

師常にの給ひしは無常迅速なる事駟馬も追へからす況や朝のあしたをまつ命終に臨て世塵に繫れ心神を労して一句をなさはひとつの道を（と勞るに到らん）よてわれハ辞世あるへからす、

行住座臥の言捨を没後のかたみとも久よと今さらに思ひあはすれは如露亦如電の教ていと

（大東京文具チエーン特製）

筆くさきにかいつけ有し一句に勝して名とも
に其次をなろへて初の七日と師尊霊の牌前に
さゝけ奉る于時寛政七年乙卯七月十五日二代
白眼堂雪才しるす、

秋たつやタ月の雫りさの露　故　雪才

伊したゐ流井の月　二代　雪才

菊ひたす瓢に酒をつき入て　雪川

自刎の髮の手にさはるゝ　雪井

あなし吹冬の寒根のたゝすまゝ　雪甫

ゆくとりて思へ思る鳥　雪先

[illegible]

詩家の追悼等篇句あり

相の炊さとゝめ人をて一艸　めしろ山人

仏も怖し一味秋の蓮かな　定来

今の馬肝の句あり

故里は葉月九日近神し　義仙は長月九日

に龍化すつわに馬口をうゝやすしとて

のかたられける

月に菊したゝ同し九日　秋梅年

不門鬼丸雲川、蘭様の句あり　微笑の句あり

野の末中尾花招て雲起る　茶東　蘭更

(大東京文具チエーン特製)

泊りあひし命婦の爰る碪かな　烏明

待宵の二階は月の夜寒哉　望逸

赤泉、徒布、菊露、拾物屋四信所等の句あり

秋七草世はひすの小月にこそ　雪芳

之師の霊まつる法莫につら寄る名追福の句く

を思なる耳の底に聞て随長のなみたとゝめ

のねぬ是を之彼我あるまゝいまそ四あり

けるをりのこと、しそくろにもの悲しくか

いる一巻も箱のうちにありあて紙奥の巣

No.

となさんもほいなきわさなれいやかてそ

のしりへに忘たる筆とそめことはの花の

さくら木にのすることはたりぬ

雪蓮社

枕流

(大東京文具チエーン特製)